

江村治樹著 『春秋戦国時代青銅貨幣の生成と展開』

柿沼 陽平

本書は、春秋戦国時代における青銅貨幣の生成と展開について論じた労作である。周知のごとく江村治樹氏は名古屋大学文学部教授等を歴任し、現在龍谷大学文学部教授として活躍する研究者・教育者である。二〇〇三～二〇〇五年度には日本秦漢史学会会長も務め、日本を代表する中国古代史研究者の一人といえる。江村氏がどこで誰に師事し、いかなる学統を継承し、どういう研究に目を配ってきたのかは本書の「あとがき」等に詳しい。また最近の名古屋中国古代理史研究会編『地域と人間から見た古代中国…江村治樹教授退職記念中国史論集』が刊行され、氏がいかに周囲から慕われているかを窺わせる。その研究手法は、一貫して考古学的手法を重視しつつ、出土文字資料や伝世文献にも目を配るというもので、とくに考古学に重点を置いている点に特徴がある。本書も当該研究手法が存分に活かされた専門書で、代表作の『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』（汲古書院、二〇〇〇年）や『戦国秦漢時代の都市と国家 考古学と文献史学からのアプローチ』（白帝社、二〇〇五年）等に続く都市研究の一環と位置付けられる。本書は青銅貨幣を扱ったもので、拙著『中国古代貨幣経済史研究』（汲古書院、二〇一一年）とも近接し、ゆえに評者が本書評を執筆することとなった。ただし江村氏の研究業績はかくも膨大・卓抜で、その重点は考古学にあり、背後に江村氏独自の中国古代理史研究の蓄積もある。一方、評者は学識不足の一若手にすぎず、現在は出土文字資料研究に重点を置いた貨幣経済史研究に微力ながら尽力するのみで、研究の視点・手法の点で江村氏と懸隔がある。その意味で評者は必ずしも江村

説の周到な学説を理解しきれていない虞れがある。ただし、本書が今後の貨幣経済史研究に資すること大であることを周知せしめんがため、また私と見解の相違する点も皆無ではないため、僭越ながら筆をとる。本書の構成は以下のごとくである。

序 章 春秋戦国貨幣研究と課題

第一章 戦国貨幣概述

第二章 刀銭と布銭の生成と展開

第三章 齊大刀の性格

第四章 橋形方足布の性格

第五章 尖足布・方足布の性格

第六章 楚貝貨の性格

第七章 円銭の性格

終 章 春秋戦国青銅貨幣の形態の規定要因

参考書目・研究者人名索引・貨幣銘文索引

中文摘要 春秋戦国時期青銅貨幣的出現与發展・あとがき

序章は本書の問題点を明示したものの、第一章は戦国時代の貨幣を国別に検討したものの、第二章～第七章は春秋戦国時代の代表的な青銅貨幣に焦点を絞って個別に検討したもの、終章は本書の検討結果をまとめたものである。各章の論述は多岐に互り、紙幅の関係上全てを紹介することはできないので、主要青銅貨幣に関する江村説をまず紹介する。

序章 春秋戦国時代の青銅貨幣に関する先行研究を紹介・整理した上で、本書の方法論を説明。貨幣を考古資料とし

て扱い、基礎作業として年代・流通範囲を確定し、極力考古学的な編年を試みた上で、文献史料や他の材料を用いて検証する。また貨幣の発行主体＝国家とする通念を取り払い、発行主体を究明する。それによって中国古代における青銅貨幣の出現・展開過程を系統的に解明し、貨幣経済の実態を時間的、空間的に把握し、文献史料からだけではうかがい知れないこの時代の社会、都市および国家の実像に迫る。以上が本書の目標・方法論である。

第一章 戦国時代に国ごとどのような貨幣が発行され、どう理解されているかを概説し、国ごとの貨幣発行の状況と特質を闡明する。なお本章では黄金・銀・銅銭牌にも触れているが、論述は少なく、本書題名との関連も希薄なので紹介しない。

第二章 刀銭と布銭を検討。布銭の歴史は一般に空首布↓平首布とされ、空首布の特大型は春秋中期後段（前六世紀前半）、平肩空首布（大型・中型・小型）・斜肩空首布（中型もしくは大型・小型）・聳肩空首布（大型・小型）は春秋後期以後とされ、黄河中流域の経済発展に伴って民間で鑄造された貨幣と考えられる。特大型は刀銭に先行する可能性がある。平首布は戦国中期以降で、尖足布・方足布・橋型方足布は戦国中期には存在した（起源・先後関係不明）。尖足布・方足布には全て地名が鑄込まれ、尖足布は五〇余种、方足布は一六〇余种前後に及ぶ。①尖足布・方足布は国境を越えて流布。②方足布の形態は国境を越えて共通。③地名は国都に限られない。④同一地名貨幣に大小・軽重・形状差異があり、中央統制下の貨幣とは思われない。⑤鑄型が銘文地名と異なる地で相当見つかり、都市有力者が亡命・移住後にそこで鑄造したとみられる。以上五点より、尖足布・方足布は都市の有力な民間商工業者が鑄造・発行した可能性が高い。他類型の地名を有する貨幣（橋形方足布、円足布、三孔布、鋭角布等）も同じ性格であろう。一方、刀銭は、尖首刀（春秋後期～戦国前期の墓葬から出土）↓燕明刀↓斉明刀↓直刀とされる。他に切首刀（尖首刀を斉国内で加工し、斉国で流通した貨幣）もあるが、詳細不明。尖首刀の銭文はすべて鑄造に関わる記号か鑄造者の略号で、尖首刀は

民間鑄造貨幣とみられる。北方遊牧民族の銅削刀を起源とする点、山戎墓地から出土している点から、狄や戎などの北方民族が発行した貨幣であろう。狄や戎が当該貨幣を発行した理由は不明。燕明刀は戦国中期に出現。錢文の「㊦」の字釈には諸説あるが、燕の国名と関わる字とされることが多い。斉明刀も「㊦」字を有し、燕との関係が窺われる。燕明刀には背文もあり、戦国中期の国家鑄錢機構名と解される。斉明刀の発行の時期・主体には論争があるが、齊地よりも燕地で一括出土する点、燕国貨幣と強い伴出関係をもつ点より、斉明刀は燕国と関係の深い貨幣で、燕の斉国占領下に発行された燕国貨幣である可能性がある。

第三章 前章で挙げた「尖首刀↓燕明刀↓斉明刀↓直刀」以外に、「尖首刀↓斉大刀」という継承関係がある。所謂斉大刀は、尖首刀・直刀・燕明刀と異なり、大きく重く周郭もある。大型・小型の別があるが、小型でさえ長さ一五〜一六センチ、重さ二三〜四五グラム。錢文は数種類あるが、九〇%以上は「斉大刀」。「大刀」二字には諸説あるが「大刀」説が妥当。編年は、決め手となる墓葬からの出土が皆無で、形状が非常に大きく他の貨幣との連続性が把握しがたく、詳細不明。だが形状がほぼ均一なので短期間に作られ、周郭があるので原始的削刀の痕跡のある尖首刀（春秋後期〜）より新しく、錢文も戦国斉系文字と類似し、戦国後期の臚化錢との伴出も多く（重量・鉛含有率の点で臚化錢と本位・補助関係にあり、「斉大刀」背文の「三十」は臚化三十枚の意、鉛含有率も高く（鉛含有率が高いほど時代が下る）、周郭も刀部と把手部で分断されておらず（Ⅱ時代が下る意）、分断している「斉之大刀」・「即墨之大刀」・「安陽之大刀」より後に出現したとみられ（それらの流通範囲は「斉大刀」より小さく東に偏り、斉の西方進出前の貨幣で）、よって「斉大刀」は戦国後期の貨幣。錢文第一字目の「斉」は地名か都市名かで諸説あるが、①斉大刀と本位・補助関係にある臚化錢の「臚」は都市名でない、②斉大刀中、「斉大刀」銘は九〇%に上り、斉国統一貨幣とみられる、③臨淄出土陶製鑄型が多数ある、との理由で、「斉」は国名と解される。つまり所謂斉大刀は、最初は斉の有力都市で発行され

た特殊目的の貨幣（齊之大刀・即墨之大刀・安陽之大刀等）で、徐々に国都で鑄造された「齊大刀」が国家統一貨幣化した。ただし初期大刀も「大刀」二字を含み、背文に共通性もあるので、所謂齊大刀はみな国家的統制下にあつたろう。切首刀（尖首刀の先端部分が斜めに切断された貨幣）や齊明刀は齊大刀と同時期だが、伴出関係がなく、数も非常に少ないので、本位・補助関係にない。巨大な齊大刀は、齊威王による大規模軍事行動の軍資金と外交工作費の黄金調達用に鑄造され、「齊大刀」の頃には小額面の賤化銭とともに一般流通貨幣へ転化した。

第四章 橋形方足布は平首布の一種だが、尖足布や方足布に比べて大型。錢文は「鉞布」形式（「二鉞」等の重量單位や地名が鑄込まれたもの）と「梁・当鉞」形式に大別できる。前者は後者に先行するが（後者は魏の大梁遷都後に発行）、流通期間はほぼ重複し、戦国中期・後期の魏国貨幣。とくに「安邑」布と梁布は国都発行で、圧倒的発行量ゆえに国家発行貨幣。戦国中期の魏は薄手で軽量の方足布を大量に発行する他、大型・中型の橋形方足布を発行した。梁布には他の貨幣との換算率が鑄込まれ、梁布は魏国の軍資金（黄金）調達用の特殊な兌換貨幣か。

第五章 尖足布・方足布を検討。銘文に多種類の地名あり。字釈等には諸説あるが、整理すると（「文字釈読の混乱と矛盾」・「地名の位置比定の不確実性」・「出土地の分布にもとづく地名同定と位置比定」の三節参照）、同一地名でも大小・軽重・形態が異なるものが相当種存在する。尖足布に多様な形態が目立つ一方、方足布の形態はほぼ一定しているが、いずれも銘文は多様。一都市が何種類もの形態の異なる貨幣を鑄造・発行した例もあり、その要因は「鑄造上の問題」陶範を作る工人の技術的原因・「鑄造時期の違い」・「発行主体の相違」にある。方足布は燕・趙で多く出土し、「旬陽」・「纒坪」・「坪陰」・「益昌」・「右明新冶」銘錢は燕明刀等と伴出し、燕地流通貨幣と考えられる。一方、尖足布は更に趙・燕に偏在し、地名も趙地が多く、趙国貨幣と解される。燕地でも出土し、趙国と燕国の密な経済関係を物語る。円足布も趙地で鑄造発行された貨幣で、年代は不明だが、角が丸くなっているのは通用の便を考えての変化とみら

れ、有角の方足布・尖足布より後のものである。三孔布には大小があり、大型の背面には「二両」、小型の背面には「十二朱」、正面には数十種の地名がある。発行の年代・主体には諸説あるが、形態の類似する円足布は趙貨幣で、三孔布はそれに穴を空けた後継形態で、戦国末の趙国貨幣。三孔布・円足布は出土例も少なく、一般流通貨幣というより特殊な貨幣。秦の重量単位（両・朱）をもつので、秦の圧力が強まった戦国末に、趙国都市が何らかの対応をするために発行した貨幣か。鋭角布の文字の釈文や鑄造目的は未詳だが、戦国中期の魏国貨幣や空首布と伴出し、戦国中期には存在した。

第六章 一五万点に達する楚青銅貝貨（流通貨幣の有文貝貨）に関する諸説を整理し、楚貝貨のデータを博搜してその性格を究明。九〇%以上は𠄎字貝貨で、𠄎の字釈は諸説あり字書にない字で、地名である可能性は低く、依然含義は不明。ただし他国出土の統一貨幣の銘文は国名か国都名か計量単位なので、圧倒的多数を占め楚国発行の統一貨幣と考えられる𠄎字貝貨の𠄎も、国名か国都名か計量単位。𠄎字貝貨は戦国晚期には流通し（考古学的に始鑄時期は未確定）、流通範囲は楚国晩期の国都の陳や寿春を含む河南東南部・安徽北部・江蘇西部・南部に集中し、湖北や湖南北部の出土例は少ない。よってこれらの地域出土の楚貝貨は陳や寿春に国都が置かれた前二七八年以後に発行された可能性が高い。秦に追われた楚が新たな経済状況に対応するため貨幣を大量発行したか。楚都が江陵の時から楚貝貨はあったが、湖北地域の楚貝貨の出土例や数量は多くない。よって楚貝貨が東遷以前に長期間発行され続けたとは考えられず、始鑄の時期は早くなく、戦国後期か。では宝貝と楚貝貨の関係はどうかというと、戦国後期の楚は中原支配者間の宝貝の伝統を踏まえて楚貝貨を貨幣としたが、宝貝は一般流通貨幣でなく貴重な財富や呪物として贈与交換や装飾に用いられた。楚墓からは、春秋時代まで装飾に用いられた大孔式宝貝は発見されているが、贈与交換用の小孔式宝貝はなく、楚国は宝貝を贈与交換に用いる習慣がなかった。だが楚貝貨は小孔があり贈与交換用の宝貝を模したものである。つまり

楚は贈与交換用の宝貝を戦国後期に貨幣の形式として選り取ったのである。よって楚貝貨は極めて観念的に創造された国家の統一貨幣であった。楚が他の形状でなく貝貨をモデルとした理由は、楚は蛮夷として中原周文化に強い関心を持ち続けたためであろう。

第七章 円錢について検討。円錢には玉璧・玉環起源説、紡輪（紡錘車）起源説、他の青銅貨幣からの変形説等がある。一般に齊・燕の方孔円錢は戦国末に出現し、「周化」・「東周」錢以外に三晉の方孔円錢はない（しかも「周化」・「東周」錢は出土例なく孤例で真偽不明）。一方、円孔円錢は戦国中期に出現し、方孔円錢と並行流通したとされる。三晉円孔円錢の大多数は「共」・「垣」錢で、「共」・「垣」は地名説（通説）、吉祥文字説があるが、ともかく空首布・橋形方足布の分布範囲と重複し、魏が特定目的で発行した特殊貨幣であろう。橋形方足布の銅含有率は七〇%超で、「共」・「垣」円孔円錢より低く、空首布・尖足布・方足布より高く、「共」・「垣」字銘のものもある。よって「共」・「垣」円孔円錢も橋形方足布同様、魏の都市の貨幣であろう。他に「安臧」・「西周」・「東周」円錢等の説明もある。一方、秦には半両錢以前に確かな青銅貨幣はない。半両錢は戦国中期に遡る貨幣で、秦の対外戦争の戦略要地で出土し（蔣若星説）、商市の自由売買でなく軍市で使用され、国家的に統制された貨幣とみられる。ただし戦国末期に秦が占領した地域からはあまり出土せず、天下統一後に広く流通したとは思われない。両甬錢は「兩甬」二甬＝十二銖＝半兩」で、半両錢の変異型とされる。甘肅・陝西・四川で出土し、秦半兩錢と伴出するので秦の貨幣。南陽附近でも出土するが、前二九二年の白起による当地支配後に当地で独自に鑄造発行された地方的貨幣か。他に有力者が鑄造した文信錢・長安錢あり。以上の三晉・秦の円錢に対して、齊国方孔円錢には「贖化」・「贖四化」・「贖六化」の大小三種があり、一般に戦国後期齊国貨幣とされる。「贖」には地名説・重量単位説・吉祥字説等あり。個別の地名ではないが、含義未詳。齊円錢には「贖」字しかなく、貨幣の統一性をしめす。贖化錢は、齊大刀の補助貨幣とする説と齊大刀に代わって出現した新式

貨幣とする説があるが、齊大刀と強い伴出関係をもつ点、「齊大刀」の重量の三〇分の一が「臚化」錢一枚で、齊大刀の背文「三十」と対応する点等より、「齊大刀」の補助貨幣。鑄造開始時期は齊宣王説と齊襄王説があるが、分布範囲は東に偏っているので、齊が西方諸国に押された戦国後期頃の貨幣か。燕方孔円錢にも「明彡」・「明化」・「一化」の大小三種があり、「彡」には「四」説や、柄部にある四直線紋の象徴説がある。「明彡」は出土例なく伝世品。「明化」・「一化」錢はほぼ北京（燕都薊）以東で出土し、「一化」錢は戦国晩期の明刀錢や漢代貨幣と強い伴出関係を有し、「明化」錢は「一化」錢と伴出するので、「明化」・「一化」錢は燕の遼東遷徙後（薊陥落後）に、重い燕明刀に代わり出現した戦国末の燕の新型国家鑄造貨幣。

第八章 第一章～第七章の結論を総括。

以上が本書に対する評者の理解である。もともと、本書の読解には中国考古学の知見が必須で、評者にとつてもやや難解であった。読者には直接本書を繙かれることを薦める。また評者自身、春秋戦国青銅貨幣に対する腹案を有するが、詳細は Kakinuma, Yohei, 2013. *Emergence and Spread of Coins in China from the Spring and Autumn Period to the Warring States Period. Explaining Monetary and Financial Innovations, A Historical Analysis*. London : Routledge 等による。そこで本評では、本書の大枠に関して若干の指摘をするにとどめたい。

第一に、各章は膨大な先行研究をふまえ、相当数の出土青銅貨幣の統計に基づいて丁寧に論述されたものばかりである。筆者も殷周寶貝の全出土地統計をとったことがあり、その成果は本書第七章でも活用されているが、そういう地味な作業は暗中摸索の淡々とした作業である。その煩を厭わず、多数の春秋戦国青銅貨幣の統計をとった筆者にまずは敬意を評したい。中国側でも類似の統計が存在し（『中国歴代貨幣大系』や黄錫全『先秦貨幣通論』等）、新資料は日々増加しているので、今後も諸統計の比較照合と新資料の付加が求められ続けるであろう。

第二に、本書の構成について著者は、第一章と第二章以降の間には一部重複があるものの、第一章は戦国各国の青銅貨幣の流通状況、第二章以下は各種形状の青銅貨幣の性格究明を目的とし、両者を目的別に区別する。これは丁寧な論述を心掛ける江村氏の配慮によるものである。ただし本書の強調点の一つは戦国青銅貨幣の発行主体の究明で、三晋青銅貨幣等の発行主体の多くを国単位でなく、各独立都市や商人に求める点にある。ゆえに第一章（国別の青銅貨幣概説）の存在は、かえって本書の趣旨を見えにくくさせているように私には思えた。

第三に、本書は青銅貨幣の考古学的編年作業を第一とし、その上で文献史学の交渉結果を補足する形を取る。筆者も指摘するように、春秋戦国時代の文字史料には青銅貨幣に関する記載が少ないので、これは仕方がない。また本書各章の元論文の副題には青銅貨幣をテキストと見なす旨が明記され、無機物の青銅貨幣を以て歴史を語らしめんとする意図が観ぜられる。だが考古学的編年作業は必ずしも全面的に文献学的考証に先行するわけではない。そもそも各青銅貨幣の出土した墓葬や遺址の年代比定は青銅貨幣に関する既存の編年を前提に推測されたものが少なくない。そこには「青銅貨幣の大きさ・形状・重さは時間の流れに沿って漸次変化する」との前提が存する。ゆえに考古学的編年は「相対年代」と呼ばれ、それを「絶対年代」に置き換えるには文字史料（出土文字資料学・文字学を含む）が必須である。しかも相対年代には異説が多い。たとえば秦半両銭の出現時期について本書は「一九五〇年代中頃に四川省郫県や昭化県の戦国晩期墓から半両銭が発見されたことから、秦の天下統一以前に遡ることが確実（三七九頁）」とするが、考古学者の宋治民氏等はいまだにこれに反対している。そこで拙著では出土文字資料をふまえ半両銭が戦国時代に遡ることを論証した。また本書は、秦半両銭が秦の対外戦争の前線基地に集中し、秦国内で使用されたとする蒋若是説に従うが、秦半両銭と漢半両銭の別は類型学的に必ずしも明瞭でなく（盗鑄銭も含む）、少なくとも評者にとって、蒋若是説はそれのみでは説得的でない。よって拙著では蒋若是説を引くと同時に、睡虎地秦簡・張家山漢簡等の分析を加味した。結論

は本書と部分的に一致するが、方法論は異なる。今後は本書と出土文字資料研究をさらに関連付けた研究が求められよう。

第四に、本書は青銅貨幣の発行主体を特定することを目的の一つとし、三晉青銅貨幣等を民間商人による私鑄とする。なるほど江村氏の指摘通り、戦国三晉都市の独立・発展ぶりに比して、秦・楚・斉・燕の都市は發達していない。秦・楚・斉・燕に中央政府の統一貨幣が存在した点も江村氏の指摘通りである。ただし江村氏が「(三晉)各地の都市が貨幣を鑄造、發行していた可能性がある。すなわち、三晉諸国の都市は、軍事的に独立していただけでなく、経済的にも独立した存在であった(二五三～二五四頁)」とする点はやや疑問である。なぜなら三晉青銅貨幣の形状には細部に差異があり、銭文等にも差異があるとはいえ、大まかな骨格自体は貝貨・布銭・刀銭・方孔円銭・円孔円銭に限定されるからである。かりに各都市が好き勝手に銭を鑄始めた場合、百個の都市に百種類の銭があってもおかしくないわけだが(三角・菱形・棒形等々)、そうではないのである。その理由は、やはり銭の形状を大まかに規定する上位権力(政治権力)が存したからではないか。当該政治権力を「国家」と断じうるかは不明で、戎のごとき集合体の長の場合もありうるが、ともかく銭が特定範囲の近隣領域で試行錯誤の過程なく(三角・菱形・棒形等々の銭が生み出されることなく)、円滑に模倣された背景には、それを繋ぎ止める上位権力の存在があったと私は考える(詳細は前掲英文拙稿参照)。

以上本稿では、本書の概要を紹介し、本書の議論の大枠を論評した。書評はその性質上、概して上から目線の書きぶりにならざるをえず、まずその非礼を詫びねばならない。またその過程で四点ほど私見をのべたが、それでもなお本書の価値は当然いささかも薄れるものではない。銭の發行主体に関して江村説と私見は相異するものの、本書の最大の価値はむしろ銭の徹底的な考古学的統計と、先行研究の吟味にこそあると思う。その意味で本書は「労作」と呼ぶに相応しく、所謂「史料」としての高い利用価値を有する。そしてそれをふまえて我々は本書とともに江村氏の諸著を併

読し、中国古代都市全般に関する「江村史学」の全体像を理解すべきなのであろう。

〔付記〕 本稿は、評者の平成24年度科学研究費補助金（研究課題「中国前漢後半期から王莽期の貨幣経済史に関する研究」、番号24820055）による研究成果の一部である。

（汲古書院、二〇二一年）

執筆者紹介

山元 貴尚 国士舘大学非常勤講師
森 和 成城大学民俗学研究所研究員
柿沼 陽平 早稲田大学文学学術院助教
富田美智恵 流通経済大学教育学習支援センター専任所員
福井 重雅 早稲田大学名誉教授
村松 弘一 学習院大学学長付国際研究交流オフィス教授
鈴木 直美 明治大学文学部非常勤講師
原 宗子 流通経済大学経済学部教授

日本秦漢史研究 第13号

2013年3月31日 発行

編集・発行

日本秦漢史学会

編集事務局 慶応義塾大学 桐本東太研究室

〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

Tel 03-3453-4511
